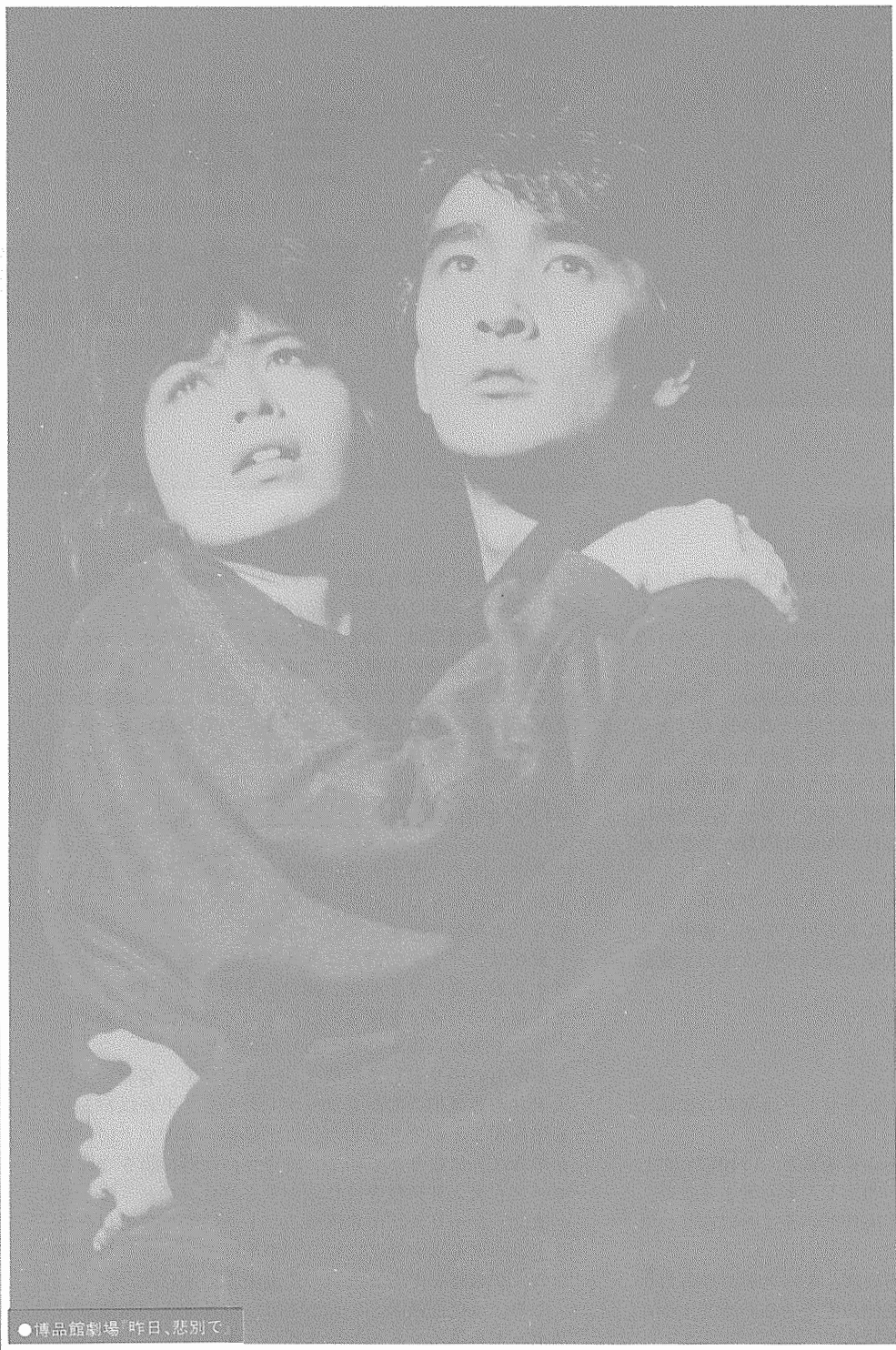


MARUMO LIGHTING NEWS



●博品館劇場 昨日、悲別で



1985-4★VOL.-56

仮設舞台での照明

- 吉本昇
- 青木博志

初心者のための オペレーター入門

- 中山功

活躍する照明家にきく

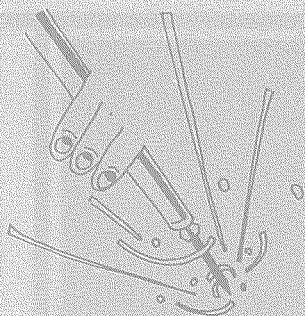
- 高城隆一郎

光のエッセイ

- 樋口昌弘

仮設舞台での照明

劇団第七病棟公演『ビニールの城』



吉本昇

(龍前正夫舞台照明研究所)

青木博志

(龍前正夫舞台照明研究所)

浅草常盤座

唐十郎作『ビニールの城』の上演場所に選んだ浅草の常盤座は、もともと芝居小屋として建てられたものですが、その後芝居の衰退にともない一時映画館として使用され、ここ数年間は閉鎖されていた建物です。

下見のために、最初に常盤座を訪れた時は、昔の芸人たちの芝居に対する思いが、そここに染み込んだような舞台や建物の雰囲気や圧迫感に魅了されたものでした。

しかし、ここで芝居を上演するとすると、舞台の規模や設備の点で、また長い間使用されていなかったために、建物そのものの傷みが考えられ、大変な困難が予想されました。

実際、昔の芝居小屋だけあって、ドロップを吊っていたらしいパイプなどはたくさんあるのですが、使用できる状態ではなく、基本的には全て仮設でやるという覚悟が必要でした。

電源

仮設でやる場合、まず気がかりなことは電源の問題です。

当初常盤座では、地下にある電源室からは10KW位しか出せないということで、一時は電源車を考えました。しかし、その後20KWは大丈夫だということになり、スタートすることになりました。

結果的には、30~40KWあれば、もっと楽になったかと思いますが、さまざまな条件の中でやるわけですから、照明だけがぜいたくはできません。

電源に関して最も注意したのが、絶対にヒューズをとばさないということです。

常盤座の電源は、地下の電源室からひいてきているわけですが、安全を考慮して途中にヒューズを入れていました。これが、芝居の最中にとんだりすることがあれば、芝居そのものがこわれてしまいます。絶対にヒューズをとばさない。これは最低限の条件です。

バトンを吊る

次に、すのこや大天井にのぼってみました。これは意外としっかりしていて、仮設のバトンを吊ることは可能なことがわかりました。

最初は、バトンの設置はサイドからパイプ組みでいこうかと思っていましたが、間口が8間もありこの広さで2段組みのパイプを使うのはかえって危険になるので、バトンを上から吊る必要があったのです。

前からの明りとして必要なシーリングも、客席の上の大天井の客電用の穴からロープをおろし、それにバトン吊るすことができました。この場合、客席の上に器材を吊ることになりますので、安全性には特に気をつけて、ロープも大天井の鉄骨にしっかりとコロシておきました。

また、シーリングの角度は、バトンに必要な器材を吊り、コードをはわせて、ロープをあげていく時点で、舞台の上から見ながら、最良の角度をきめました。

このように仮設のいいところは、一番欲しい角度からスポットを吊るせることだと思います。

サス合わせ

仕込みでは、バトンは上で固定してある上に、クッパも高いので、サスの当たりをどう調節するかということが大きな問題でした。最初は、人力で人を上まであげて、1個1個おろしてもらって調節しようかと思いましたが、たまたま常盤座に4間のイントレがあったのでこれを使うことにしました。ただし、舞台の上は傾斜になった装置が仕込んであり、シーリングの方も仮設の客席を作っていましたので、足場が悪く、イントレを使うにも十分な注意が必要でした。

コード

舞台が大きく、器材の仕込みも多かったので、使用したコードの量も大変なものになりました。このコードは、安全のうえからも、綿コードは一切使わず、全てキャブタイヤコードを使用しました。

コードにかぎらず、仮設の場合は、消防署からの安全上のチェックがおこなわれます。この公演でも、本番に先立って消防訓練をおこないました。

作業灯・楽屋灯・客電・足元灯・非常口灯

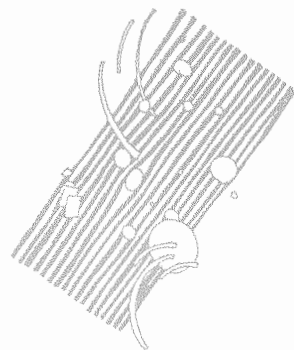
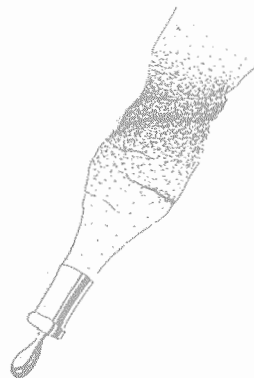
照明の仕込みそのものは、6~7人で比較的早くできましたが、意外と大変だったのが作業灯や楽屋灯などの仕込みです。最初から劇場の設備は一切使用できないという前提でしたから、道具の搬入の前にまず作業灯を仕込むことが必要だったわけです。

調光器

調光は24本×3段の調光卓と切替用としてT-10を用意しました。仮設の場合、オペレーターは、舞台が一番よく見えるところで操作をおこなうことが大切です。常盤座では、2階の下手よりでおこないました。

また、今回の公演でフォロースポットをやっていたのは、照明については全く素人の俳優でしたが、とてもうまくフォローをやっていました。

もちろん、テクニックに関しては、プロの方が旨いとは思いますが、彼らは俳優の動きやセリフを全部おぼえて、フォローをやっているわけです。芝居の流れに対して敏感に反応しながらのフォローには、見ていてとても感心しました。



ライトチェック

通常は、本番が始まる1時間前に劇場に入って、ライトチェックをしますが、今回は電球が切れたり、色がとんだりといったトラブルがあった場合、それを直すためにはイントレを組む必要があり時間がかかるので、必ず本番の2時間前にライトチェックをおこなうようにしました。

もれ明り

また、もれ明りについても十分な注意が必要です。

特に、音響や照明のオペレーターの手元明り、客席の足元灯のもれ明り、非常口灯のもれ明りにはずいぶんと神経を使いました。

マチネのある日には、本番前に暗転にして、外からのもれ明りがないかも点検する必要がありました。

今回の常盤座の公演で興味深かったのが、本当の深い闇ができたということです。

普通の舞台では、闇というのは作りづらく、濃いブルーで闇にしてみたりしますが、奥行きがある常盤座の舞台では、本当の闇になるわけです。したがって、この闇を十分に生かすためにも、もれ明りに対する注意は神経を使いました。

プランについて

照明プランを考える際に気をつけたことは、舞台が広く、セットも30尺もある大きいものでしたので、舞台そのものを広く感じさせずに、観客の目が俳優の演技に集中できるようにするということでした。ですからベタ明りで舞台全体を明るくすることはせず、演技のおこなわれるエリアをきっちりとおさえて、俳優の動きをしっかり追っていくという明りになりました。

舞台のタツバが高いので、上の方の空間を真暗な闇にして、よけいな光線をつくらないようにし、またセットに明りがもれるとセットの大きさが誇張され、俳優がより小さく見えてしまうので、その点にも注意が必要でした。俳優の演技に観客の目を集中させるために、できるだけ光源も見えないように配慮して仕込みもおこないました。

演劇における照明は、俳優に全てを託すもので、彼らが表現しようとしているものをきっちり見せ、つつみこむことが大切です。ライティングのチームが目ざわりに、一人歩きをしてはいけななものだと思います。

照明にかぎらず、音響や他のスタッフも、演劇創造の上では妥協をせず、おたがいに張り合いながら、それを俳優に託していく。観客はその俳優の演技を見て感動する。ほくたちスタッフというのは、そんな俳優と観客の姿を見て感動するものだと思います。

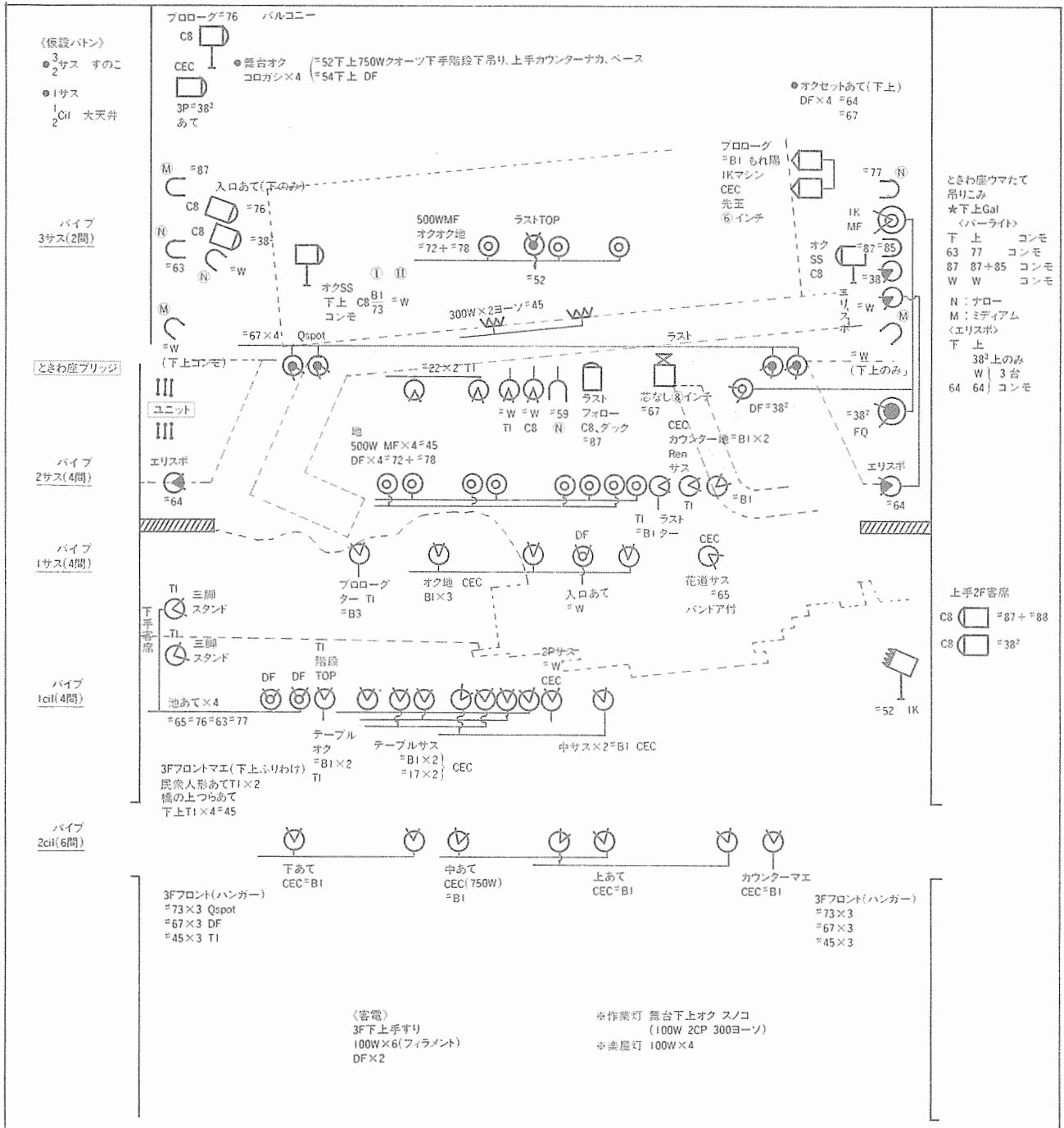
(本文は吉本、青木両氏のお話をもとに、編集、構成しました。)



●劇団第七病棟公演「ビニールの城」

劇団第七病棟『ビニールの城』照明仕込み図

とさわ座 (ジェネレーター) 6K モーター
楽屋口外 電源



切替盤
TIO (2F客席) 24本
単独もの 調光卓 3段

(3F客席)
フローランプPin 650W×2
=B1
=A3
=16

- ①電源は地下配電盤より舞台下手ユニットまで 22φ60m 20K 100Aブレーカーを地下配電盤室マエに設置
- ②客席フォローSpot用電源は 地下配電盤・SW(ヒュース付)より 2K 50m
- ③配線は全てCPコードを使用

初心者のためのオペレーター入門

入門までのステップ——その1



中山功

(S・L・S)

照明をはじめる人に

思いがけず照明係になってしまった人、志あって自ら進み出た人、いずれ来ってしまう公演日までに何とか「照明」のイロハをなどと悩んでいる人、人さまさまではあるが、学校や、サークルでの現場では、こうした人々が結構たくさんいると思います。

こうした人々の一番の関心はというと、今度の公演の「照明プラン」(「デザイン」というべきでしょうか)をどう創り上げたらよいか、その基本的な、あるいは手とり早いノウハウはないものかということだろうと思います。

「照明の作り方」のメニューの注文です。——そうしたものがあれば、苦労はないのですが——。

また、一方で「メニュー派」のA君に無理矢理口説かれて、ついつい乗ってしまったB君、C君のように、現場で何をしたいものやら、どう器材を仕込んだり、転換したり、操作したらいいものやら困っている人たちもいて、稽古場の実状はえらくニギヤカです。

そこで、こうした人たちを「照明担当者」として、「僕はここはこうしたいんだ!!」とすっかり決め込んでしまっているA君と、それを具体化する術もなくオロオロしているB君、C君を、少々強引に私たちの現場に連れ込んで、話を進めてみたいと思います。

と同時に、時にはA君の「照明の作り方」の問題をはじめ、基本的な問題に立ち戻るといって方法を取りながら、最終的には「舞台照明入門」の手助けになり得たらと思います。

照明部門の持ち場

いきなりですが、図1・2は公演現場の照明部門の各持ち場(パート)を簡単に表わしたものです。

この関係は、公演の内容によってもっと複雑にも簡素にもなりますし、重複したり、兼務したりすることもあります。

講堂や公民館など常設でない場所の場合でも、規模の大小は別として基本的には変わらないと思います。ただ、劇場、または多目的ホールなどを利用する場合、初心者がこれらの持ち場を全て自分たちで支配することができないことは、経験的に承知していることだと思います。

これは、管理上、保安上の問題がほとんどですので別に触れるつもりですが、いずれにせよ通常考えられる関係としては大差ありません。



図1

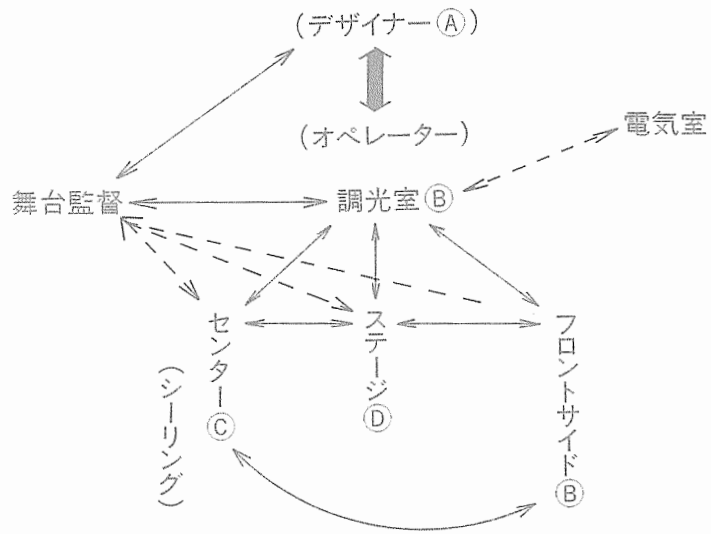
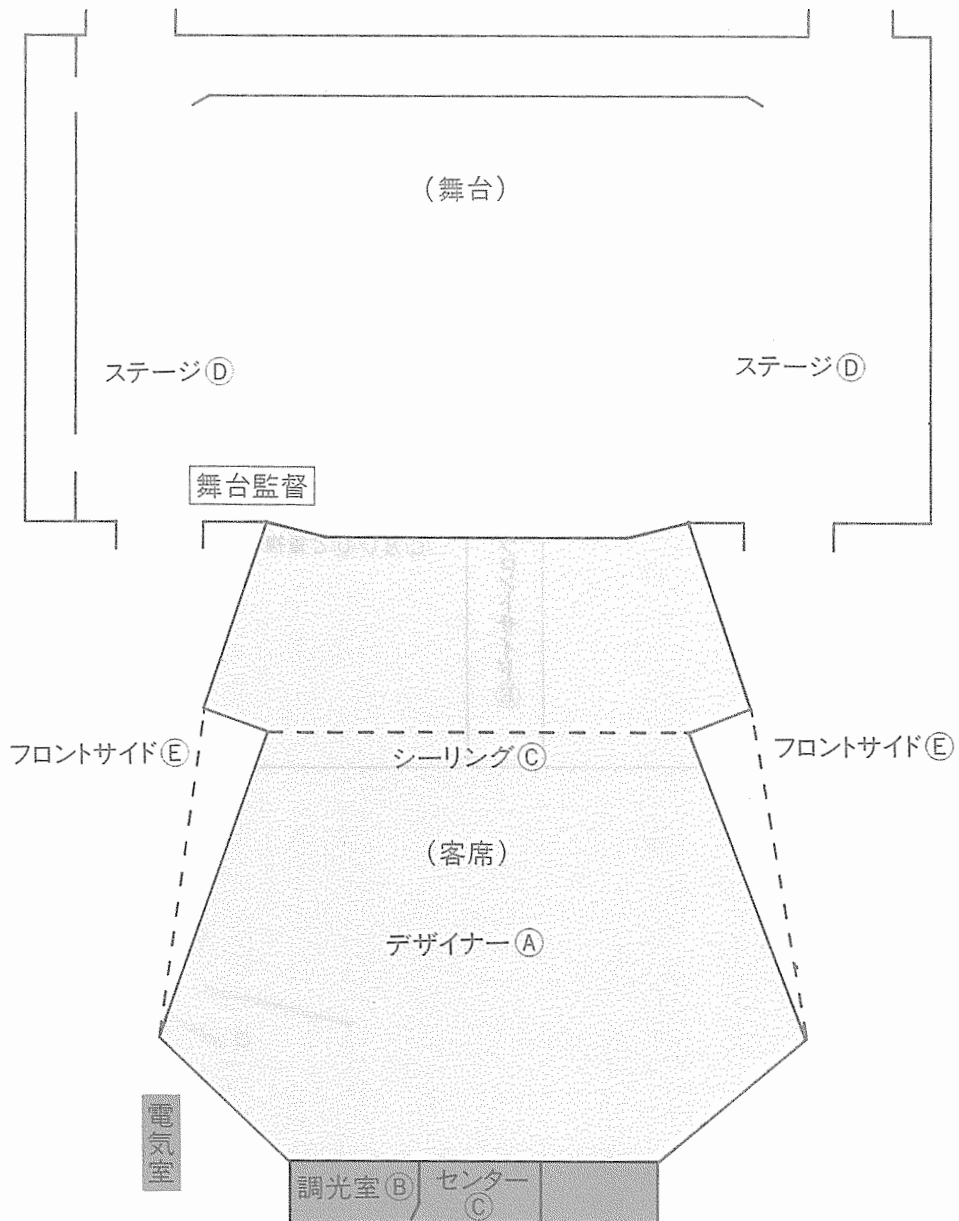


図2



仕事の内容

では次に各持ち場の仕事の内容を見てみましょう。

表1は仕事の内容を簡単に示したのですが、もちろんこれだけが全てではありません。

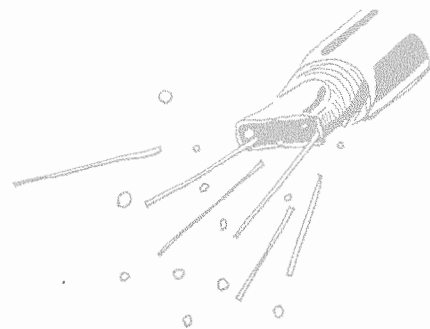
それに、これはとりあえず劇場に入ってからの仕事であって、実はここに至るまでに準備し、用意しなければならないことがたくさんあって、それが実は非常に大切なことは言うまでもありません。

A君、B君、C君も無事ここに至ることができるなら、問題のほとんどを解決したといっても過言ではありません。

次回では、表1に従って、**Ⓑ調光器**、**Ⓒセンター**、**Ⓓステージ**、**Ⓔフロントサイド**といった、それぞれのパートの人たちがどんな準備をし、劇場にたどり着き、どんな手順をふみながらこうした仕事を進めていくかを具体的にみることにします。

表1

デザイナー Ⓐ	オペレーター(仕込み→操作実行)	
「Q(キュー)」の設定 ① 仕込み図作成 ② 器材の種類、設置場所、カラーフィルターの指定など	調光室 Ⓑ	「Q」台本の作成 ⑤ 組表の作成 ⑥ 各シーンごとの「データー」の記録 ⑦ 再現操作実行 ⑧
明り合せ ③ 各シーンごとの色の配合、光量の調整、タイミング、スピードなどの設定	センター (シーリング) Ⓒ	フォロー台本の作成 ⑨ カラーフィルター、光量の記録 ⑩ タイミング、スピードの確認記録 ⑪
各パートへの確認 ④	ステージ Ⓓ	転換用図面の作成：記録 ⑫ 作業手順の確認 ⑬ 実行中の全体の確認 ⑭
	フロントサイド Ⓔ	Ⓒ 及び Ⓓ と重複

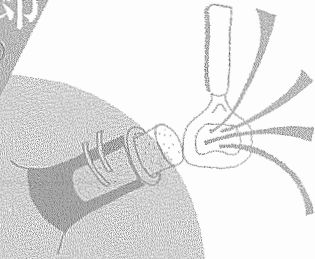


活躍する照明家に

きく

高城隆一郎

(ライティング・ビジュアル)



宇宙空間

ぼくの仕事は8割方がコンサートですが、コンサートの照明では、ある程度自分のイメージをふくらませて明りをつくっていくことができますから、機会があったらこんな試みをやってみたいというように、普段から自分の中でいろいろなイメージやプランをあたためていることも多いんですね。

そういった仕事の中で印象に残っているのが、喜多郎さんのコンサートです。

実は4、5年位前から、宇宙空間のようなものを舞台上で表現してみたいと思っていたんですが、それが喜多郎さんの音楽の世界とうまくマッチして、実現できたわけです。

劇場には、タッパとか奥行きといった物理的な制限がありますが、これを明りでこわして、広げていって、宇宙のような空間をつくれないうかと思っていたわけです。

たとえば、実際には奥行きは5間位しかないものを、観客には8間にも10間にも見えるようにして、舞台の奥に吸い込まれていくような感じをあたえるといったように。

最初はそういった漠然としたイメージでしたが、喜多郎さんの音楽に出会って、仕事をしていくうちに、イメージがどんどん具体的になってふくらんできて、光のビームでピラミッド状のものをつくったり、スライドを使ってみたりして、宇宙空間というイメージを思っていた以上にうまく表現できたと思いました。

こころがけていること

そういった仕事の時、一番気をつけていることが、けって照明家の思い込みだけでやらないようにすることです。

舞台を見る観客に感動が生まれてこなかったら、どんなに自分のイメージが素晴らしいと思っていても、それは失敗ということですからね。自分の思いだけで先走りはしないようにこころがけています。

もうひとつ注意していることは、長い間この仕事をやっていると、プランをやっているでも、ある程度のところでこれでいいんじゃないかなと思ったり、自分のプランの型を出そうと思ったりすることがあるんです。

これは、絶対によくはないと思う。まだ若いから、自分の明りの型というのはつくりたくないし、自分でつくった明りに対しては、本当にこれでいいのかと、常に自分に問いかけていきたい。

たとえば、人から「いい明りだね」といわれると、それで安心して、終わってしまう部分があるでしょう。そんな時も、本当にこの明りでいいのかと自分自身に反論していくクセをつけたいと思っています。

モニター

そんな意味でも、ぼくにとって恐い存在なのが、各地の照明家の方ですね。ツアーで全国を廻っていると、各地の照明家の方とは家族的な付き合いになってきますし、その付き合いというのはぼくの先輩たちから続いているわけですけど、その人たちは、ぼくらよりもいろいろなものをたくさんこなしているという部分がありますから、当然目がこえている。ですから、その反応は気になりますし、自分の仕事に対する良きモニターなんですね。

照明は裏方

最近では映画でもバックステージものが評判になったり、テレビでもディレクターやスタッフといった裏方にスポットがあたってきましたから、いまの若い人には照明の仕事も、ファッションブルな職業としてみられているところがあるんでしょうね。

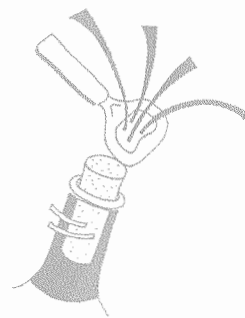
でも、スポットがあたってきたといっても、所詮裏方は裏方の部分がありますから、仕事の上では自分で耐えていかなければならないところがあります。

ファッションブルな見方だけで入ってくると、やっぱり自分の思いと違っていたということで、途中でやめていくことになるんでしょうね。

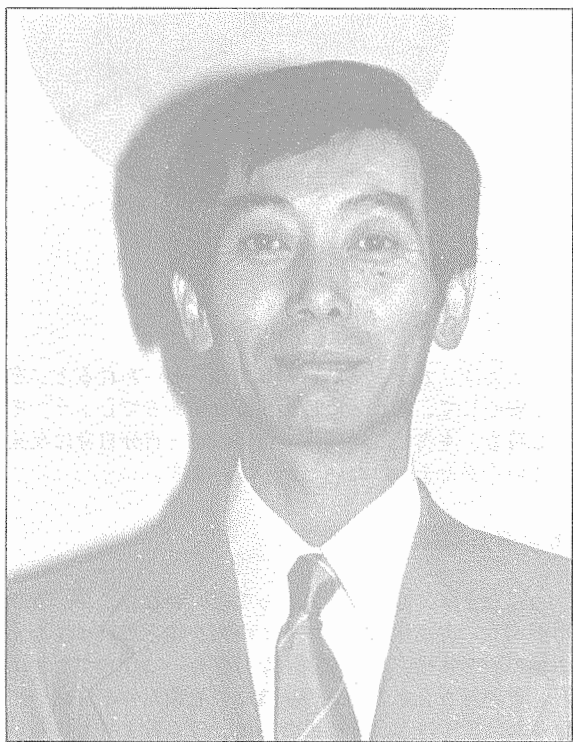
ぼくの場合は、別にこの仕事でなきゃいけないということではなかったけど、ただ始めた以上は、何年かはがまんしたいなと言うパワーみたいなものがありましたね。

それは、負けずきらいとかいうのではなく、先輩の仕事を見て、こんな美しいものをいつかは自分もつくってみたいという気持ちが、そういったパワーになっていたと思います。先輩たちが仕事を通して、パワーを授けてくれたんでしょうね。

丘の風景



樋口昌弘



●(ひぐらまさひろ) 演出家 劇団『昂』所属 主な演出作品に『魔女が女になった時』『三月のサギ』などがある。

頃ともなると、空にも秋の気配がしのび寄り、さっと一刷毛はいたような雲が夕方の陽の光を受けて、金色にふちどられながら浮んでいたのが、太陽が徐々に光を失って朱色の楕円形の球となって山の影に姿を消すにつれ、次第に夜の闇にとけ込んで行き、月の出と共に、再び暗黒の背景の中に白々と姿を現わしもする。そして夜の田は青黒く静まりえっている。

曇った日もまたいいものだった。冬のどんよりとした空の、一点の雲の切れ間から陽がこぼれると、白々とした空気の中に数条の光の帯が流れて足元の田の一部を照らし、そのけぶる様な光の条は泰西の宗教画を思わせる雰囲気を持っていた。

しかし、そんな平和な光ばかりを見ていたわけではない。二十年三月の夜の大阪空襲の時には、大阪旧市内の上空の一定の高さから、細い光の線条が幾本となく縞模様になって降りそそぎ、その中に大阪城の天守閣が黒々としたシルエットを見せている光景を、市内にある元の我家が焼けているとも知らずに、家族と共に眼にしたし、その数日後には、何の前触れもなく飛んで来たアメリカの艦載機が投下した焼夷弾で、淀川の堤防にあった揚水小屋がみるみるうちに火に包まれたのも見た。昼下りの火災なのに、その火の色が毒々しいほどに赤黒い色をしていたことを憶えている。小屋は暗くなるまで燃え続けていたが、消火に駆けつけた人間は一人もいなかった。

その後、ぼくは次第に芝居の世界に足を向けるようになった。芝居好きの祖母に連れられてよく歌舞伎座に足を運び、楽屋にも出入りするうちにそうなったのかも知れない。中学、高校、大学と、教室へ通うというより演劇部の部室へ通う生活が続いた。

その頃、初めて見た新劇は、文学座の『華々しき一族』だが、その中で強い印象を受けて今でも憶えているのは、やはり夕日の色だ。劇中、ガーシェインだかのレコードに聞き入って登場人物一同が静止するほんのわずかの間に、窓から射し込むライトがあかあかと輝き、幼い頃から見なれた夕日の影を舞台に作り出した瞬間、ああ、ここにも自然があると意識した。

その後に見た舞台で印象に残るのは、文学座の『娼婦マヤ』で夜の街角で踊る男女をシルエットで包む青い夕闇のあかり、『武蔵野夫人』の笈の水の照り返し、俳優座の『天使』の最終景の、白々と明けてゆく診療室の夜から朝への光の変化、ロンドンのナショナルで見た『田舎女房』での、光量を絞ったスポットを三十数台一ヶ所に集中して作ったセピア色の照明などだ。

昭和十八年の冬からほぼ十年の間、ぼくは大阪郊外の小高い丘のでっぺんにある家で暮していた。

そこは淀川をとりまく河内平野の東端で、我家の西側は急な斜面で平野につながり、すぐ目の下を走る京阪電車の線路の向うには、約二キロ先の淀川の堤まで広々とした田園が続き、河の向うの町はぼうとかすんで、その先には六甲山系に続く山がどっしりと腰を据えていて、晴れた日の夕方にはその山のむこうに、太陽が刻々と大きさと色合いを変えながら沈んで行くのが、何物に邪魔されることもなく見ることが出来、低い角度で差し込んでくる赤い光は、ほとんど水平に家の中に入り込んで、畳のケバの影を襖にうつすといった、そんな風景の中の住いだった。

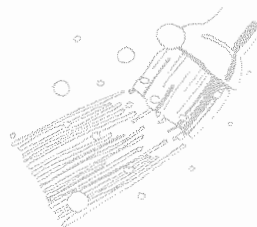
大阪市内から疎開して来たときの都合で、二駅はなれた隣町の小学校に通わされたため、家の近くに学校友達の少なかったぼくは、よく一人で、この西に開けた広々とした自然の中の光の変化を、あかずに眺めていたものである。

太陽が毎日、定められた道程に歩を進めると、足元の田畠は四季とりどりの異った色あいを見せてくれた。黄色い菜の花の季節が過ぎると田には水がはられ、昼の陽をキラキラと輝かせ夕方の赤い光をはねかえす様になり、いつしかそれが柔かい緑の絨緞に変わるかと見る間に、成長した稲はそよぐ緑の波となって、時には白い葉裏をひるがえす。その波が次第に黄ばんだ色帯びはじめ

数年前、ラティガンの『海は深く青く』を演出したとき、ある劇評家に、写実に徹した演出なのに夕景の空の色はなっていない、ブルーを使うとはマナリズムそのものだ、といわれたことがある。それは失意の主人公が唯一人、電燈もつけないがらんとした部屋にとじこもっている時の、窓の外の夕景の色なのだが、ぼくはその色合いといい、明るさの度合いといい、写実そのものだと思っている。つまりそれは現在ぼくが生活している場で見ると同じものだからだ。

現在の我家のダイニングは二階の北東の角にあって、北側と東側はスリガラスの中の広い窓になっている。夕刻、ここに坐っているとガラスは次第に青く染まり、透き通った青から群青へと色の度合いを深めて行く。舞台のブルーの照明も、正にこの光の変化の道程を忠実になぞっていた。

東京の狭い街並みの一隅で、ぼくはこの窓に子供の頃に見た広い自然の光の思い出を重ねて見ていることがある。太陽の光とそれを通す空気とのかかわりは、四十年前のそれと少しも変わっていないのだ。いや、未来永劫変わらないものなのだ。



卒業記念に贈るMARUMOの照明器具

思い出を託して贈るスポットライト

一すじの光との出会いは、若い心の中に限りない想像力をかきたてます。

一台のスポットライトに身近かに手を触れた時、その顔にはかけがいのない輝きがひろがります。

そこには、舞台照明という光の世界が教えてくれる、創造することへの期待と喜びとが息づいているのです。

MARUMOは、この感動をより多くの方に知っていただくために、卒業記念に贈る照明器具のラインアップを用意しました。

演劇部の活動はもとより、文化祭、入学式、卒業式、講演会、音楽会と学校生活の中で行われるさまざまな文化活動やセレモニー。

今、学校では、若い心が夢をふくらませ、感動をわかち合う、こういった場でのステージライトの活躍は欠かすことのできない、貴重な存在となっています。

さまざまな思い出を託して贈られる卒業記念にふさわしく、MARUMOの照明器具は、夢と感動を伝え続ける役割を果たしていきます。

卒業記念に最適なラインアップの一例

- スポットライトCEC-II型 1,000W + カラーホイル + アイリスシャッター + スタンド 1台 ¥127,900
- ビンスポットERO-20型 650W + カラーホイル + スタンド 1台 ¥188,000
- サスペンションライト
DF型 500W スポットライト + ハンガー 1台 ¥34,900
- T-1型 500W スポットライト + ハンガー 1台 ¥27,000
- ボーダーライトBC型 100W + 36灯3cir 1列 ¥303,760
(取付費別)

★詳細につきましては、本社営業部か最寄の営業所へお問い合わせ下さい。皆様のご計画にあわせたプランをご用意いたします。また、ご希望の方には当社製品のカタログをお送りします。

●大阪出張所

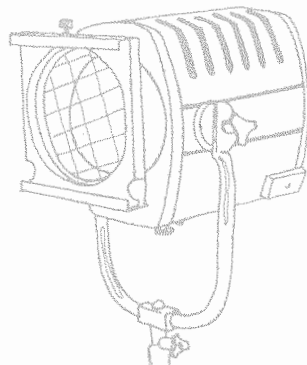
大阪市北区野崎町9-6(東梅田ビル) ☎06-312-1913-1922

●名古屋出張所

名古屋市中区栄4丁目1-1(中日ビル) ☎052-263-7425

●福岡出張所

福岡市中央区大名1-14-45(福岡鴻池ビル) ☎092-741-4762



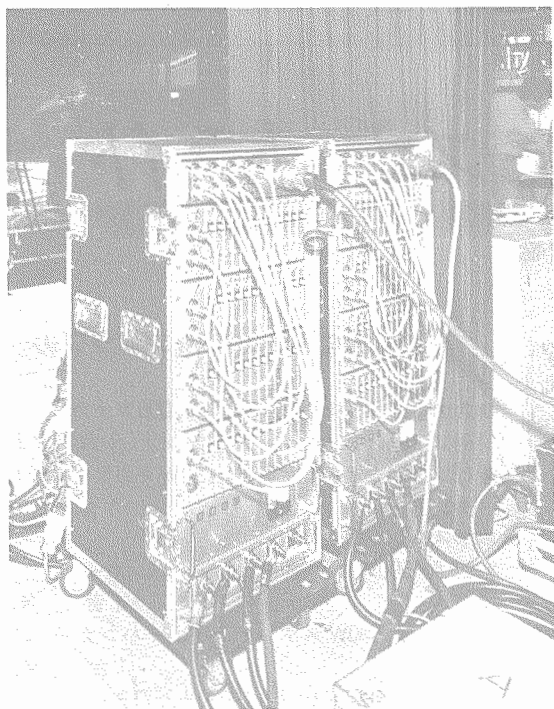
コンサートツアーからフィールドステージまで

ゼム ツアー

MARUMOビルトインタイプ・ギャデマー調光器ZEM-TOUR



全国各地のコンサートツアー、屋外特設ステージでのパフォーマンス……演劇や音楽、各種のイベントまで、最近のステージは自由と変化を求めて様々な空間にひろがっています。MARUMOビルトインタイプ・ギャデマー調光器は、これらのニーズに合わせて開発された可搬型のコンパクト調光器です。大型器なみのチャンネル容量をもち、しかもワンケーブルですべての仕込みをまかなえる省力型——あらゆるステージに、頼りになる新型器の登場です。



ゼム・ツアーの特長

ワンケーブル・パラレル入力

ゼム・ツアーは照明操作卓——調光器間をすべてワンケーブルで結びますから、仕込み時の省力、現場での保安面などで大きな威力を発揮します。

また、従来のパラレル信号でも作動させることができます。

集中制御方式を採用しています

心臓部のゼマー調光器は集中制御方式ですから、調光特性がよく各回路ごとのバラつきもありません。

ユニット方式です

調光器はすべてユニット方式でビルトインしていますから万一の故障時でも、予備と差しかえて直ちに使用できます。

大型器なみのチャンネル数です

ゼム・ツアーは36チャンネル(19インチラックマウント・12ch×3)の回路数をもっていますから、イメージ豊かな照明シーンをたやすく作りだすことができます。

小型・軽量

520×850×450(mm)の大きさで、約90kgワンタッチでコンパクトに収納できるトランク型ですから、従来型の約1/2のスペースですみます。

編集室

●『仮設舞台での照明』は、昨年10月に東京・浅草の常盤座で上演され、各方面から大きな話題を集めた『ピニールの城』の照明について、お話をうかがいました。数年も使用されていなかった古い芝居小屋を使っただけの上演ということで、さまざまな苦勞があったことが、お話の中からもうかがえましたが、そんな苦勞にもかかわらず、

既成の劇場では表現できない、独自の劇空間のあり方を探っていくこのグループの行き方には、非常に刺激されるものを感じます。

●『初心者のためのオペレーター入門』は、中山氏にオペレーターの仕事を通して、照明についてわかりやすく書いていただきます。今回は第1回ということで、前文の形になりましたが、次回からはできるだけ実戦的に、オペレーターの仕事をこまかく紹介していきたいとはりきっておられます。5～6回の連載を予定しております。ご期待下さい。

●発行——丸茂電機株式会社
〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(252)0321(代)

●編集責任者——井上利彦

編集協力——小川昇舞台総合研究室 東京舞台照明 レクラム社

●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居など住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊店からお届けします。